ISSN-1880-4799 信州短期大学紀要，第 21 巻，20-29（2010.3）

研究ノート

介護福祉学生に対する「生と死の学習会」の効果

根本秀美（信州短期大学）

The effects of “workshops on life and death” on care work students

Hidemi Nemoto（Shinshu Junior College）

Abstract: This study involved holding “workshops on life and death” and examining their effects, with the aim of helping care work students develop well-balanced views of life and death. The workshops were held seven times between June and November 2008, and their effects were determined on a five-grade scale. We assessed students’ views using a “scale on the view of life and death” prior to and following the workshops, and cross tabulation and a t-test were performed. An analysis based on cross tabulation showed that those in the high-score group recognized the necessity of education on death, and their anxiety about death was reduced, indicating the positive effects of the workshops. However, the test using the “scale on the view of life and death” revealed no marked changes in their views. It is necessary to conduct further research, as a future challenge, to improve the assessment method using this “scale on the view of life and death”.

Keywords: Workshops on life and death,　Education on terminal care, A view of life and death, Care work students

1. はじめに

近年介護保険により看取り加算が創設され、介護の現場で看取りをする施設がふえてきており　また医療とは異なった介護での看取りに関心がおよんでいる。介護の対象者は高齢者や障害者である。特に高齢者の場合は、たとえ元気であっても、着実に死に近づいている。介護者はその時期にかかわることが多く、介護者のケアの質により、利用者の人生の最終段階での質が決まるといっても過言でなく介護においてのターミナルケアの重要性は高い。

厚生労働省[1] は求められる介護福祉士像 12 項目の 1 つに予防からリハビリテーション、看取りまで利用者の状態の変化に対応できることを挙げている。そのためには、介護福祉士養成校においては基礎的な知識や技術を教える必要があり、本年度から改定された教育カリキュラムの教科としては生活支援技術の終末期介護に含まれている。

高橋ら[2] の介護福祉士養成校の全国調査（175 校）報告では、「すべての養成校でターミナルケア教育は行われており授業で重点的に教えている内容は、心理面の援助、学生の死生観・人生観を深める、身体面の援助、介護福祉士としての基本姿勢である。教員の授業に対する満足度は、まあまま満足と満足をあわせて 26％、あまり満足をしていないと不満は 40％である。不満の理由は、授業の時間数が少なく体系化されていない、また授業の困難性を感じている、自信がない」と報告している。まだ研究や議論も少ないため、何をどのように教えるかが整備されていないためと思われる。

筆者が考える介護におけるターミナルケア教育は 2 つの柱があると考える。1 つは生と死についての知識と死生観を育む教育、2 つは実際の介護を行う場面で必要なことで、死に向かう対象者（高齢者）の身体的精神的な特徴の理解と精神的ケア、スピリチャルケアと具体的な方法と処置である。教える内容は完全に区別できるものでなく、それらをお互いに補完し合いながら教えていくものと考える。人生経験の豊富な利用者の方のターミナルケアを行うためは利用者の死生観や人生観を理解し共感できる必要がある。そのためにも介護学生自身のためにも死生観を育む必要があると考える。

そこで今回は介護におけるターミナルケアの対象者の身体的精神的特徴と介護場面における具体的な技術よりも死に対する知識や態度に重きを置き死生観を育むことを目的として「生と死の学習会」を計画し実施した。

本研究の目的は、介護福祉士を目指す学生のターミナルケア教育の一環である死生観を育む教育として「生と死の学習会」を行いその結果を考察し効果を判定するこ

とである。

2. 用語の操作的定義

1. ターミナルケア教育　介護福祉士養成校で教えている生活支援技術など（旧カリキュラム介護概論、介護技術など）その他の終末期ケアや処置や「生」と「死」に関する教育全般である。
2. 「生と死の学習会」　介護福祉士を目指す学生に表1で行った7回の学習会である。誕生から死を取りあつかっている。
3. 死生観　生と死についての考え方、生き方や生きる意味や死をどのようにとらえるかについての個人の考え方、価値観や感情や態度である。

3. 生と死の学習会

生と死に関する教育は「死の準備教育」、「死の教育」、「生と死の教育」等がある。

アルフォンス・デーケン[3]は死の準備教育の目的として、「私たちは人生において、いつかは身近な人々と自分の死に直面せざるを得ない。死そのものを前もって個人的に体験できないが死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを取得する。よりよく生きるための教育である」と述べ教える内容は多岐にわたり15の目標をあげている。

若林[4]は「死の教育とは人間だれでもが平等に訪れる死を視座に入れ生の意味を問い直す、死を手がかりに自己確認する道程である。自分らのかけがえのなさを認識し、他を思いやる心をはぐくむことが目標である」と述べている。

平山[5]は「死の教育は、将来訪れる死に対して準備をすることと、死を思い、死を体験することを通して未来と現在の生をより生きることを目指すのであるから「生と死の教育」とし、積極的な生の充実」を述べている。

介護福祉士学生に対しては、前述の3名が述べている死を学び現在と未来への生き方を考えていく内容と実際の場面の対応を学ばなければならないと考える。

内田[6]は介護福祉士養成における教育内容6項目を上げている。1は自分の問題として死を考えさせ、死生観を育成する。2は高齢者の心と体について修得、3認知症の理解医学や臨床的な理解と支援制度、4生活の場の看取り病院との違い、5看取りケア技術の修得、6介護保険制度で求められる看取りのすすめ方を述べている。生と死の意義、生き方を問い直すなど、まず死生観を育むことを重要視している。

1.「生と死の学習会」の目的

近年高齢化がすすみ病院だけでなく介護施設や自宅での死亡が増え、日常生活の延長上に死がある介護のターミナルケアの充実が望まれる。介護職は、知識や技術はもちろんのこと利用者の死生観や人生観が理解できそれと同時に利用者の幸せの援助をし、尊敬の念をもってケアにあたることができることが大切である。そして最期をむかえていただくことができるように日ごろから介護者自身の死生観や介護観を育み人間的な成長が求められる。

介護福祉学生の現在の死生観は生い立ちや今までの環境から作り上げられたものであり、今後あらゆる経験や見聞の中で育っていく。今後介護福祉士になる学生には教員は意識的に命の尊さを教え、死生観や介護観を育む教育が必要と思われる。そのため今回「生と死の学習会」を計画した。学ぶことの大切さを知るためにも一方的に教えるのではなく学生自ら調べ発表し討論する内容としたので教育という文言は使用せず学習会と名づけた。

2. 内　容

学習会の日時、テーマ、内容、学習方法を表1で示す。

1）　アルフォンス・デーケン[7]は「死の準備教育は知識・価値・感情・技術の4つのレベルを必要としている。知識レベルは専門知識の伝達、価値レベルは各人が自己の価値観の見直しと再評価を行い生と死にまつわる価値観を身につける、感情レベルは死を感情的情緒的側面から対峙に取り組む、技術レベルは技術の習得である」と述べている。これらの内容を学ぶことが出来るものとした。具体的な技術は内容から外した。

2）　身近で実際に見えるもの体験できるものを入れた。渡辺[8]は「介護福祉士学生は死を身近にみる体験が少ないため「死」を未知なものとしてとらえ具体的なとらえ方ができない。死を深く考えられるようなきっかけをつくることが介護福祉士教育の課題だ」と述べている。身近に感じるためには、身近に死が迫っている人の話や、葬儀社見学を入れた。また分かりやすいものとして絵本[9]を使用した。

3）　生と死を通して命の大切さを、学生自身の生きていることの貴重さ大切さを認識してもらう。

実際の介護のターミナルケアを行っている大高[10]の

表 1　生と死の学習会の内容

回数	2008 年 日時	テーマ	内　　容	教材学習方法
1	6 月 30 日	いのちのつながり このすばらしき命	自分が誕生し今生きていることの貴重さと神秘さを理解する 自分も人も尊いことを学ぶ 命は前からつながっており後世につなげるもの 命の誕生をみる	1）祖先をたどる演習 2）胎児と赤ちゃんの誕生のビデオ鑑賞
2	7 月 3 日	生と死をみつめて	実際に死に直面してる人の話を聴いて、その思いや経験を聞き、自分の生きる意味や生き方を考える	進行乳がん患者の講演会
3	8 月 1 日	わすれられない おくりもの	死は必然にくるものであること、老人は多くの知恵や経験を持っていること。尊敬され、大切にされる存在であること。あとに残されたものはそこから学びそのことを引き継いでいくことが重要であること。残されるものの悲嘆などを学ぶ	絵　本
4	9 月 18 日	死のかたち	老衰　自然死・尊厳死・安楽死を調べ死に対する知識をもつ	各自調べ発表
5	10 月 6 日	儀礼にみる日本人の死生観	日本の儀礼を知り日本人の民族や風習を学ぶ そこから日本人の死生観を知る	各自調べ発表
6	10 月 28 日	葬儀について	葬儀の意義や役割を知る 葬儀から日本人の死生観や世界観を学ぶ	葬儀社見学 葬儀社の方の講話
7	11 月 10 日	介護のターミナルケア	認知症で最期まで徘徊した老人の思い	事例検討

現場の報告によると、「臨終の場は命のバトンタッチで、看取りは学びに場でもある。亡くなって行く利用者は命の尊さを残された家族や職員に伝えている」と述べている。その命のバトンは命の大切さを知り命を引き継ぐ意味を考えてもらうために、まず学生自身の誕生について考えさせる。祖先をたどる演習[11] や赤ちゃん誕生のビデオ[12] をみて認識してもらう。

4）　生まれてからの人生儀礼や風習　風俗、死後の儀、礼、日本人の死生観を学ぶ。

一般に人は生い立ちや環境等から死生観を育んできている。介護の対象である高齢者も同様で地域社会の風習や民俗のしきたりなどが根底にあり人生観や死生観を培っている。利用者を理解するためは必要である。介護は日常生活の援助が主な役割であり、それは単に ADL（日常生活動作）や APDL（日常生活関連動作）の自立の援助ではなく人間としての尊厳を守りその人の生き方を最期まで尊重しなければならない。

5）　実際の介護事例で考えてもらう。

認知症の周辺症状である徘徊を最期まで行っていた利用者の事例[13] である。

3. 方　法

2008 年の 6 月からほぼ 1 ヶ月に 1 回開催、1 回の時間は 60 分～ 90 分程度行う。司会は学生が行う。正規の授業ではない。また介護実習の経験はない。

4. 研究方法

4.1　対象者

S 短期大学　介護福祉専攻 1 年生　12 名（男性 4 名女性 8 名）

4.2　研究期間

2008 年 6 月～ 2008 年 11 月

4.3　データ収集法

1）「生と死の学習会」（以後学習会とする）第 1 回前と第 7 回終了後に質問紙による調査

項目は基本的属性、介護福祉士を目指す動機　身内の死の体験、自分の死を意識する体験

2）　毎回の学習会終了後の質問紙調査

（1）5 段階で評価

5 よかった　4 まあまあよかった　3 どちらともいえない　2 あまりよくなかった　1 よくなかった

（2）感想や気づきを記入してもらう

3）　死生観尺度　第 1 回学習会の前と第 7 回終了後に調査

「看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因

表 2　死生観尺度

		第Ⅰ因子　死の準備教育
1		死について考えることは人を成長させる
2		自分の望む死を迎えるための準備が必要
3		死を考えることは、生を見直す機会になる
4		終末期の身近な家族と接することは生と死を考える機会になる
5		死について学ぶこと、教育は必要である
6		幼い子どもにも身近な人の死を体験させることは大切である
		第Ⅱ因子　死の不安
7		自分が死ぬことを考えると不安になる
8		死ぬまでの過程を考えると不安になる
9	○	死は怖くない
		第Ⅲ因子　身体と精神の死
10		意識がもどらない植物状態でも生きていけると思う
11		意識がもどらない植物状態でも治療することが大切
12		たとえ脳死状態でも生き続けることは大切である
13		意思疎通ができなくても生きることは大切
		第Ⅳ因子　遺体の思い
14	○	脳死と診断されれば臓器移植しても良い
15		たとえ献体のためでも、遺体に傷をつけたくない
16		病理解剖のためでも遺体に傷をつけたくない
		第Ⅴ因子　人生の終焉
17		死とはこの世の苦しみから解放されることだ
18		死はすべての終わりである
19		死は人生の完結である
20		死は存在がなくなることである
		第Ⅵ因子　死後の世界
21		死後の世界はあると思う
22		世の中に「霊」「たたり」があると思う
23		死んでも魂は残ると思う
24		人は死後、また生まれ変ると思う

○は逆転項目

分析、岡本双美子、石井京子」の死生観尺度[14] を使用した。生と死について学んでいくことの大切さを認識する必要があると考えたので、教育の必要性の項目がある死生観尺度を用いた（表 2）。

5. 分析方法

1. 各学習会の評価点と基本属性、出席回数、死生観尺度のクロス集計をする。
2. 学習会前と後の死生観尺度を使用する。
   5 段階尺度とし否定的なものから肯定的なもの 1 ～ 5 点として加算する。
   特に学習会に参加して学んだ結果、生と死について学んでいくことの大切さを認識すること、また死に対する不安についての変化をみることで学習会の効果が判定できると考える。
   1）死の準備教育の必要性の認識が増す
   2）死に対する不安が減少する
   1）2）を作業仮説とし t 検定を行う
3. 学習会の効果をみるために毎回の学習会の感想や自由記載の内容を死の準備教育の必要レベルの知識・価値・感情について考察する。

6. 倫理的配慮

1. 学習会の参加は自由意志であること。つらくなった場合は、退席してよいこと
2. 質問紙は答えたくない場合は答えなくてよいこと
3. 学校の成績評価とは一切関係がないこと
4. 研究者は秘密を保持し研究以外は使用しないこと

1 ～ 4 を学生に口頭で説明し承諾を得た。

7. 結果と考察

7.1　単純集計

7.1.1　基本属性

基本属性を表 3 で示す。

対象の学生の平均年齢は 18.3 歳、全員高校卒業後入学した学生である。男性 4 名女性 8 名の 12 名である。自分が死を意識した経験について、事故は 4 名、病気が 1 名、他は友人関係や自分に生き方等悩んでの 2 名であった。短期大学に入学してからは死を意識した体験はない。事故においては自分が運転していた交通事故が多く注意喚起の重要性を痛感していた。身内の死の経験はあるが 7 名で内 1 名が曾祖母他は祖父母であった。介護福祉士を目指したきっかけは 12 中 6 名が祖父母の死や病気により手助けをしたい、あるいは手助けできなったこ

表 3　基本属性

ID	姓	年齢	身内死経験	自分の死を意識したこと	介護福祉士を目指したきっかけ
1	男	18	×	○	性格を生かす
2	男	18	○	○	曾祖母の死
3	男	19	○	×	人の役立つ仕事
4	男	18	○	×	回答なし
5	女	18	○	×	祖母の病気
6	女	19	○	○	曾祖母の施設入所
7	女	18	×	×	祖父の病気
8	女	18	○	×	先生勧められて
9	女	18	×	○	人の役立つ仕事
10	女	19	○	○	祖父の死
11	女	19	×	○	祖母の介護の手伝い
12	女	18	×	○	やりがいのある仕事
平均		18.3			
SD		0.49			

○あり　×なし

とによる無力感があり、それを取り戻すために介護福祉士を目指していた。我々教員は介護福祉士を志した動機を大切に持続させ、知識や技術は勿論のこと老人から学び老人を尊敬できる人間に育てていかなければならないと考える。

過去に身内の死を経験をしている学生は 7 名で、そのうち 1 名は曽祖父母で他 6 名は祖父母であった。

7.1.2　学習会の結果

各学習会の出席、評価平均を表 4 で示す。

出席者の平均は 10.7 人、各学習会の 5 段階評価で平均は 4.2 である。葬儀社見学後の評価はとることが出来ずにデータなしである。第 1 回目 5 回目の日本人の死生観が 3.7 と低い理由は、自由記載から学生が各自あるいは友人と調べて発表ということであったが、調べてこないで参加した学生がいたことで、学生の不満や士気が落ちたためであると考える。

表 4　学習会の結果

回	テーマ	出席人数 n＝12	評価平均	SD
1	いのちのつながり このすばらしき命	11	4.4	0.67
2	生と死をみつめて	12	4.4	0.53
3	わすれられない おくりもの	12	4	0.85
4	死のかたち	10	4.4	0.52
5	儀礼にみる日本人の死生観	11	3.7	0.48
6	葬儀について	12	—	—
7	介護のターミナルケア	7	4.3	0.52
	平均	10.7	4.2	—

表 5　各学生の結果

ID	出席回数	評価平均
1	5	4
2	7	4.4
3	4	4.3
4	6	4.2
5	7	4
6	7	4.2
7	7	4.4
8	5	4.8
9	7	4.2
10	7	4.3
11	6	3.8
12	7	3.8
平均	6.3	4.2
SD	1.06	0.28

7.1.3　各学生の結果

各学生の出席、評価平均を表 5 で示す。

学習会の出席回数は平均 6.3 回であり 5 ～ 7 回の間である。評価平均点は 4.2 で SD＝0.28 で大きなばらつきはない。3.8 と低い女子学生の理由は、自由記載欄から前述したように、各自調べ発表することであったが調べてこない学生がいることで、学習会がスムーズに進まなかったこと、自分が担当であった会の司会が本人としては満足のいくものでなく、役割が充分果たせなかったと認識したための不満であった。

7.2　クロス集計

各学生の評価の平均点は 4.2 で平均点より高群と低群に分け出席回数、男女差、身内の死の経験との間に傾向があるかを調べるためにクロス集計を行った。12 名中高群 8 と低群が 4 と偏りがあるのは、平均の 4.2 の 4 名を高群としたためである。

7.2.1　評価×出席

全出席の方が高群が多く低群の 2.5 倍で、欠席ありの方は高群が 1.5 倍にすぎない。したがって全出席の方が高群を生み出しやすい。低群は評価点が低い傾向にあることは、欠席すれば前回の内容が分かりにくい可能性もあり、自ら学ぼうという姿勢が少なければ評価点も低くなる傾向にあると考えてよい（表 6）。

7.2.2　評価×男女

男性においては高群の率が多く低群の 3 倍で女性は 1.7 倍にすぎない。したがって男性の方が高群を生み出し

表 6　評価×出席

	全出席	欠席あり	計
評価高群	5	3	8
評価低群	2	2	4
計	7	5	12

表 7　評価×男女

	男	女	計
評価高群	3	5	8
評価低群	1	3	4
計	4	8	12

表 8　評価×身内の死の経験

	身内の死の経験　あり	なし	計
評価高群	6	2	8
評価低群	1	3	4
計	7	5	12

表 9　死生観尺度単純集計

	死の準備教育			死の不安		
ID	前	後	差	前	後	差
1	23	16	-7	13	13	0
2	26	24	-2	13	9	-4
3	17	23	6	14	15	1
4	—	—	—	14	9	-5
5	24	19	-5	12	15	3
6	22	22	0	13	11	-2
7	16	21	5	8	7	-1
8	25	25	0	8	5	-3
9	22	29	7	13	15	2
10	21	25	4	12	13	1
11	20	25	5	15	15	0
12	17	22	5	11	13	2
平均	21.2	22.8	1.6	12.2	11.7	-0.5
SD	3.37	3.46	4.7	2.21	3.45	2.54

やすい。男性の方が学習効果が高いと考えられる（表 7）。

7.2.3　評価×身内の死の経験

身内の死の経験がある学生は高群が多く、ない場合は低群が多い。これは身内の死の有無が学習会の効果を左右するという重要な知見である。死の経験ある 7 名のうち 1 名が曾祖母で他 6 名は祖父母であった。祖父母の死の時期や同居等の親密度の程度等はわからないが、今回の学習会の内容をより身近な経験を通して感じたり考えることができるため評価点が高くなったのではないかと考える（表 8）。

介護福祉士を決意し S 短期大学に入学した理由に祖父母の死や病気で介護したいが 12 名中 5 名であった。これから祖父母の介護をしたい、また充分な世話できなかった無力感であったなど祖父母の病気や死の経験が大きな理由であれば、身内の死の体験を大切にした学習会は効果が大きいと思われる。

7.3　死生観尺度

7.3.1　単純集計

加算した集計を表 9 で示す。

学習会の効果があったかを考察するために死生観尺度をツールとして用いた。死生観尺度の第 1 因子の死の準備教育の平均は学習会前 21.2 SD＝3.37 で学習会後 22.8 SD＝3.46 でプラス 1.6 とふえている。

死生観尺度第 2 因子の死の不安は学習会前の平均が 12.2 SD＝2.21 であり、学習会後は 11.7 SD＝3.45 で不安はマイナス 0.5 となっている。しかしどちらも前と後でプラスに移行している学生とマイナスに移行している学生がいて変化の方向はまちまちである。

7.3.2　評価×死の準備教育（前）

学習会の評価点の高群・低群と死生観尺度の得点の高群・低群とクロス集計を行いなんらかの傾向があるかを調べた。

死生観尺度の第 1 因子死の準備教育について、学習会前の平均点は 21.2 であった。平均点より高群は 6 名、低群は 5 名であった（表 10）。

死の準備教育高群においては、評価の高群の率が低群の 2 倍で低群が 1.5 倍であり多少は多いが学習会前であるためそれほどの違いはないと考えてよい。

7.3.3　評価×死の準備教育（後）

死生観尺度の第 1 因子死の準備教育について、学習会後の平均点は 22.7 で、平均点より高群 6 名、低群 5 名であった。死の準備教育の高群では学習会の評価点が高く、低群では評価も低い（表 11）。

学習会前と後を比較すると、死の準備教育の必要性についてはさほど差はなかったが、学習会後は評価点の高

表 10　評価×死の準備教育（前）

	死の準備教育（前）高	低	計
評価高群	4	3	7
評価低群	2	2	4
計	6	5	11

表 11　評価×死の準備教育（後）

	死の準備教育（後）高	低	計
評価高群	5	2	7
評価低群	1	3	4
計	6	5	11

表 12　評価×死の不安（前）

	死の不安（前）高	低	計
評価高群	5	3	8
評価低群	2	2	4
計	7	5	12

表 13　評価×死の不安（後）

	死の不安（後）高	低	計
評価高群	3	5	8
評価低群	4	0	4
計	7	5	12

群ほど準備教育の必要性を感じていると考えてよい。

7.3.4　評価×死の不安（前）

学習会評価点の高群・低群と学習会前の死の不安の高群・低群と学習会後の死の不安高群・低群をクロス集計して傾向を調べた。

学習会前の不安の平均点 12.2 より高群 7 名、低群 5 名であった。

死の不安が高いは評価高群が低群の 2.5 倍であるが死の不安の低いは 1.5 倍で評点の高い学生の方が不安は高い傾向にあると考えられる（表 12）。

7.3.5　評価×死の不安（後）

学習会後は死の不安の平均点は 11.7 で、その点数より高群が 7 名低群が 5 名であった。

学習会の評価点が高群 8 中不安が高い 3 低いが 5 と明らかに不安は低群が増えている。

評価点の低群 4 名中 4 名が不安の高い群である（表 13）。

前と後で比較してみると学習会前は評価点の高群のほうが不安が高い傾向にあるが、学習会後は不安は低群に移行している。反対に低群は学習会後には不安が高くなっている。

学習会をする中で死というものが単に怖いものでなく必然でだれにでもくるという肯定的にとらえることができた可能性もある。

7.4　統計的検証（t 検定）

7.4.1　死生観尺度前後比較

死生観尺度の第 1 因子の死の準備教育の学習会前後の t 検定を行った。

死の準備教育については各学生の変化の方向は学生によってまちまちであり、また統計的な検査の結果前後変化は有意でない（$t = -1.14$.　$p = 0.14$（片側）．$p = 0.29$（両側））。

死の不安について各学生の変化の方向はケースによってまちまちでありまた統計的な検査の結果前後変化は有意でない（$t = 0.68$.　$p = 0.25$（片側）．$p = 0.51$（両側）。

その結果仮説は立証されなかった。

変化の方向（差の符号）がまちまちであることは、生と死の学習会の成果評価法に関して基本的な考慮が必要と考える。すなわちプラスになることがよいのかマイナスになることがよいことなのか。本研究の将来的な課題である。

7.5　学習会の感想

学習会の自由記載の感想とその内容を教育の必要な知識・価値・感情レベルに分類した（表 14）。

知識レベルでは 1 回目、4 回目、5 回目から死についての知識を得ている。「在宅死をする人は何が必要か興味をもった」とあり、今後の介護という仕事に結び付けて考えている。6 回目からは民族によっての埋葬法の違い、通過儀礼や葬送儀礼の意義などの知識を得ている。7 回目の事例からは認知症の方の死生観について学んで介護観も育んでいる。

価値レベルは、1 回目自分の命が、非常に多く祖先のかかわりがあるから現在存在しておりその偶然と神秘性があることで、自分に対する価値の再認識をしている。2 回目「生きたいと思っても生きられない人がいるにもかかわらず自分が恥ずかしくなった。自分の不満は小さいと思った」と自分の生き方の見直しをしている。また「こんな自分でも何か役に立つことがあると思う」と自分を前向きに再評価をしている。3 回目「死んだら何も残らないと思ったけど、悲しんでもらえたり、教えてもらったことや思い出が皆の心に残ることはすごく幸せなことだと思う」生きていることの意味や価値を学んでいる。「自分もアナグマのような死に方をしたいと思った。それは生きているあいだにどれだけの人の役に立ち教えられるかが大切だと思う」アナグマの生き方に学んでいる。

感情レベルは 2 回目「好きな人に囲まれて死にたい。演者は死にちゃんとむきあっているだけあって私たちとは違う」目の前で死期が近い演者と自分との対比で死を考えている。3 回目「アナグマはやり残したことがないから死を受け入れたのだと思う」と死の受容の理由を考えている。「一番怖いのは回りの人を残していくこと」

表 14 「生と死の学習会」の感想

回	テーマ	感想	レベル
1	いのちのつながり このすばらしき命	1）私たちは普通に意識しないで生活しているけれど、自分が生まれるまでには、いろいろなことがあって、生まれてくる。命のつながりがものすごく深いと思った。	価値 知識
		2）自分の誕生には祖先をさかのぼって行ったら何百人の人がいることにあらためて驚いた。	知識
		3）赤ちゃんが生まれるためにお腹になかで呼吸の練習などをして準備をしていることに驚いた。	
2	生と死をみつめて	1）自分の死について考えたことがなかった。生きる大切さを学んだ。	価値
		2）生きたいと思っても生きられない人がいる。自分が恥ずかしくなった。自分の不満は小さいと思った。こんな自分でも何か役に立つことがあると思う。	
		3）死は暗いイメージがあるけどやっぱり一番こわいのは回りの人を残していくこと。	価値 感情
		4）演者はちゃんと死にむきあっているだけあって私たちとが違う。	
3	わすれられない おくりもの	1）自分もあなぐまのような死に方をしたいと思った。それは生きている間にどれだけの人の役に立ち教えられるかが大切だと思う。	価値
		2）死んだら何も残らないと思ったけど悲しんでもらえたり、教えてもらったことや思い出が皆の心に残ることはすごく幸せなことだと思う。	
		3）アナグマはやり残したことがないから死を受け入れたのだと思う。	感情
4	死のかたち	1）安楽死も尊厳死も老衰もいろいろな意味や説があることがわかってよかった。	知識
		2）自宅で死を望んでいる人に何ができるのか考えて興味を持った。	
5	儀礼にみる 日本人の死生観	日本の儀礼の意味や葬儀にもいろいろな種類がある。	知識
6	葬儀について	1）死んだ後どのようになるのかを見ることができた。	知識
		2）初めての葬儀社だったので新鮮だった。	
7	介護の ターミナルケア	1）事例の認知症の方は、息子に対する自責の念をうちあけて、介護者が理解したからこそ、その人らしい最期を見守り看取ることができた。とてもよい介護だと思った。	技術
		2）認知症の方は何を考えているか分からないと思っていたけど、その人なりに忘れないで体で分かっているんではないかと思う。	知識

と死の恐怖を表出しているが、他の学生の感想からは一人称の自分の死の恐怖や不安の感情は表出されていない。

このことは感情レベルで死を感情的情緒的側面から対峙に取り組むことは自分や身内が死に直面したり、介護の場面で利用者が直面している状況に遭遇したときに可能になるのではないかと考える。

技術レベルについては実際の授業や実習で習得するものとしていたが、7 回目認知症の方は、「息子に対する自責の念をうちあけて、介護者が理解したからこそその人らしい最期を見守り看取ることができた。とてもよい介護だと思った」と学生は死が間近い利用者へのかかわり方を学んでいる。

各レベルではっきりとは分けることが出来ない内容もあるが、感想から学習会での学びはあったと考える。

8. 全体的考察

死生観を育む目的で生と死の学習会を行ったことに対する全体的な概観を述べる。

1. 総合評価

効果判定のために、1）死の準備教育の必要性の認識が増す、2）死に対する不安が減少する、と作業仮説をたて学習会前後の死生観尺度を比較した。死の準備教育の必要性は認識が全体で増え、死に対する不安は減っており、外観的には当初の期待に合致した。統計的検定を行った結果はいずれも有意ではなかったが、死の準備教育はプラス効果が優越していた事実が見られたることから効果があったとの蓋然性は一定の程度あったと考えられる。

しかし各学生をみると変化の方向（差の符号）がまちまちであることは、生と死の学習会の成果評価法に関して基本的な考慮が必要と考える。点数的に増えることが単純に効果があったと判定できるのか、死の不安については点数が減ることが学習会の効果があったと判定できるのか根本的な課題が生じる。学習の必要

性について学習会を行って知識を得たことで却って負の印象の可能性があり、死の不安につては、いままで死について考えていなかったにもかかわらず、学習会をしたことで死を身近に感じ不安が増強した可能性も考えられる。個々学生においてはプラスの方向マイナス方向に動いたことが学習会の影響から変化があったとの解釈も成り立つ。死生観は長年の生育暦や習慣や環境により培われたものであり個別性も高く、学習会等の影響も個々によって異なる。死生観尺度を使い授業の成果を見出している報告もある[15]。しかし本研究では学習会の効果判定法として死生観尺度を使用した評価方法に課題が残った。今後もサンプル数を増し検討を重ねたい。

2. 関連のクロス集計

学習会の評価点の高群・低群と出席回数と死生観尺度についてクロス集計の結果は順当なものであった。死生観尺度については、学習会後は高群が死の教育の必要性を感じ、また死の不安については学習会後は減っている。このことは学習会の効果と考える。また身内の死の有無が学習会の効果を左右するという重要な知見がえられたことから今後の学習会においてはその情報を得ておくことは重要である。また男性の方が学習効果が高いと考えられる。

3. 学習会の内容

評価の平均点 4.2 は一応の肯定的な結果と考えられる。自由記載の感想からは、充分とはいえないにせよ各学習会で取り上げた内容の知識や自分の生や死に対する価値の再評価も出来ていたと考えられる。

しかし死に対する恐怖や不安、死の不安や死に向き合うという記載は少なく、感情面につての取り組みは不充分であったと思われる。学習をしていても学生は三人称の死ととらえがちであることと、緊迫した一人称の死を仮定することが難しいからであると考える。アルフォンス・デーケン[16] が述べているように終末期をケアする専門職において過剰な死の恐怖は利用者との死について語り合う障害になり、ターミナルケアの障害となると述べている。学生は、身内の死や親しい人の死の経験や実習で臨終に遭遇することは少ないが、今後の自分の死を想定したり、経験や機会を有効に使いながら感情的情緒的側面から死の問題を取り組む必要がある。

9. 結論と課題

1. 学習会の評価点の高群は死の準備教育の必要性を高く思う傾向があり、死の不安は学習会前には高い傾向があったが、学習会後には低い傾向に移行した。逆に評価点の低群は学習会後の死の不安は高い傾向が見られた。学習会の効果があったと考えられる。
2. 各学習会の自由記載からは死についての知識と自己見直し等価値のレベルの学びはあったが、不安等感情レベルについては充分でなかった。今後の学習会の内容や方法に工夫をする必要がある。
3. 身内の死の有無が学習会の効果を左右する。
4. 死生観尺度を用いた前後における効果の検定の結果は有意ではなかった。
5. 死生観尺度を使用した効果判定法として考慮が必要であると知見を得たことが本研究の成果であり、今後の課題である。

10. 研究の限界

対象者は少人数であるため限定された結果結論である。

［投稿 2009 年 10 月 30 日、受理 2009 年 12 月 25 日］

［引用文献］

1） 厚生労働省社会援護局：介護福祉士養成における教育内容等の見直しについて　厚生労働省　2007
2） 高橋美岐子 佐藤沙織：介護福祉士養成施設におけるターミナルケア教育」の現状と課題　介護福祉教育 2003.7　p76～80
3） アルフォンス・デーケン編 「死への準備教育第 1 巻　死を教える」 メヂカルフレンド社　1986 p6～48
4） 若林一美：死の学習を通しての自己確認―アメリカのカリキュラムを参考に―　学校保健研究　1986 28（6） p263～267
5） 平山正実：死生学とはなにか　日本評論社　1998 p276
7） 内田富美江：介護福祉教育における死と看取りの教育の必要性　川崎医療短期大学紀要 28 号　2008 p53～58
7） アルフォンス・デーケン編　前掲 5） p3～6
8） 渡辺きよみら：介護学生 1・2 年生の死生観の比較検討　大阪体育大学短期大学部紀要 2007

9） スーザン・バーレイ　訳　小川仁央　わすれられないおくりもの　評論社　2000
10） 大高智子：キラリと輝くその秘密　柴田久美子さん　介護支援専門員　Vol9　No3　p6　2007 厚生労働省社会援護局：介護福祉士養成における教育内容等の見直しについて　厚生労働省　2007
11） 古田晴彦：「生と死の教育」の実践　清水書院　2002　p73～77
12） 赤ちゃんこのすばらしき生命：企画制作　NHK エデュケーショナル　VHS
13） 背山静子：施設での看取りに必要なこと　月刊福祉　2007　p48～49
14） 岡本双美子・石井京子：看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析　日本看護研究学会雑誌　2005　vol 28　No4
15） 園田麻利子：上原光世：ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討　鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要　2007　vol 11　p21～35
16） アルフォンス・デーケン編　前掲 5）p5

［謝　辞］

本研究に協力をしてくださった学生の皆さん、まとめるに当たり御指導してくださった聖学院大学大学院教授松原望先生に深く感謝致します。